昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十七年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二八一号）

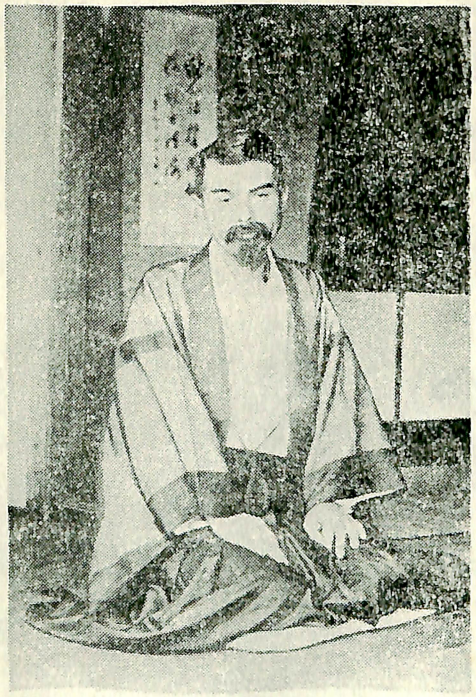
慈光

第二十四巻　第十号

目次

池山先生生誕百年記念……(1)
弔辞（昭和十三年）……近角常観……(2)
池山先生の遠い思い出……舟岡省五……(3)
父のことども(二)……池山寿夫……(5)
池山先生のプロフィル……北岡行男……(11)
あまねく……信国淳……(14)
池山先生の追憶……榊原徳草……(16)
池山先生生誕百年に想う……花田正夫……(24)

池山先生生誕百年記念



大正十三年夏　岡山高校時代
明治六年　東京市　生誕

『呼子鳥』――遺詠――

たのまるるただ念仏のわれ
にありさるべき業はさもあ
らばあれ

われならぬ清らのわれのわ
れにありて穢悪（えあく）
のわれをわれにしらしむ

よき人の仰せにききて御名
をよべば、よばはせたまふ御
声きこえぬ

弔辞

（昭和十三年）

近角常観

池山栄吉君の霊前に申し上げます。

如何なる宿世の因縁にや、君と私とは兄弟とも謂うべき交りを結ぶこと丁度四十年になります。その間には国家宗教関係の問題につき意見を同じうし、君が研鑽の結果をもたらして、真面目に真一文字に馳せ参ぜられたこともあります。又三年の間、共に洋行して日夜日本宗教界のことに心を砕きて、苦心惨怛した事もある。一々これを回想するに、今更ながら感慨無量である。されど中心として君と私とを結びつけたものは『歎異抄』一冊である。

君はすこぶる温厚篤実の人にして、誠に孝心深く、かつまた社会民衆に対して同情心に富み、理想と現実の矛盾につきて少なからず煩悶懊悩をした様であった。その極みに何気なく心頭に忽然（こつねん）として浮かび出でた歎異抄第二章の有名な、「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」という一句であった。

実に君が念仏の行者として行住坐臥声を絶たなかったことは、私共の遠くおよばぬ次第である。

君が歎異抄をドイツ語に翻訳し、またこれを意訳して普及せられたことは何人もよく承知のことである。

殊に簡易生活に甘んじて名利に超然たるありさまは涙ぐましいことであった。教信沙弥を慕われたる親鸞聖人のおもかげは、たしかに君が晩年の行儀に見ることが出来る。

「それがし閉眼せば加茂川にいれて魚に与うべし」

という聖人の御遺言そのままが、おそらくは今日の御葬儀であるだろうと遙かに哀悼の涙をそそぐ次第である。

実は私も長男文常が十月一日、盧山の激戦において無碍の一道の信念をもって粉骨捨身、一命を君国に捧げ、私一生の間、口に筆にしたるものを身をもって沈黙実行し、父に代りて、信界顕現して思い残すことはなくなった次第である。この時、あたかも往生の素懐を遂げられたる電報を受取った。今日は我が前法主（光演）台下、求道会館に御弔問をかたじけのうした。この機会においてまた、兄の命終を申上げて、御直筆の院号法名を下附せられてご送附申上げる次第である。『無碍院釈一道栄信士』

これが、今生における四十年来の深交の結果である。もはや来世における倶会一処の楽しみを期するよりほかはない。

昭和十三年十一月十二日

池山先生の遠い思い出

舟岡省五

先生の遠い思い出は、私の青年期の思い出である。田舎の中学でほんの野育ちのまま岡山の高等学校に入学した当時の思い出である。

友人に誘われて市内の小原町の光清寺で開かれた仏教青年会で先生の法話を聞かせていただいたことがある。私が先生を知ったのはこれが最初であった。この時、ファウスト劇の話をお聞きした。私は中学時代にファウストの英訳を読みかじっていたので、第一部の筋書は大要知っていた。先生は非常にたくみな話術で第一部を話されたが、第二部になると急に言葉もあらたまり、ファウストの天国願求の心境を説明せられた。当時、誘われるままに悪魔に魂を売りかねまじい無鉄砲な青年だった私は、実のところ先生の法話の結論をのみこみ得なかったのであるが、人生の趨帰におぼろげな疑問を抱くようになった。

移り気な青年時代の私はしかし別段深く立ち入ってこの根本問題に触れてみようともしなければ、先生に質問して解決の道を求めるでもなく日々の学生生活に追われて過して来たのである。

第二回目に先生のお話を聞いたのは高等学校の某先生のお宅であった。この先生は新婚間もない時であったように記憶する。当時、無遠慮な書生連が、新家庭に如何に迷惑になるかと云うことも考えないで、お出でになった池山先生に取り止めもない、法螺（ほら）まじりの質問を発して寄宿舎の門限まで過したことがある。その時、先生は

「君の云う事は哲学だ、自分の求めるのは信仰である」

と教えられた。私はいまだ信仰と道徳との区別も知らなかったのである。私は、池山先生は私共とは別の世界に住む人のような気がしていた。

法を聞いて信じ得ず、道を聞いて歩み得ないのは、私の業の所為とも知らない。私はそれからキリスト教会にも足踏みしてみた。又、市内の小林寺の方丈について禅の真似をもしてみた。しかし素養もなければ、根気もない私には何の得るところのないのは当然のことで、次第に一切宗教的なものから遠ざかるようになってしまった。

高等学校三ケ年の生活も終り近くになった或日、私がお世話になっていた、当時の岡山医学専門学校々長、菅之芳先生のお宅で池山先生に会ったことがある。池山先生は菅先生とは囲碁の好敵手であって、時々烏鷺をたたかわせて居られたようである。

当日、取り次ぎに出た玄関子は私自身であった。学校では遠くのほうからお姿を見ることは度々であったが、その後先生と言葉を交わす機会もなかったのである。

「君はこゝの家に居るのですか」

と云われたまま奥へ通られてしまった。話はただこれだけであるが、心中おだやかならざるものがあった。それは菅先生は敬虔なキリスト教信者であったからである。当時信仰と人間生活との関係を知るはずもない私には、

「真宗の堅い信者である池山先生がキリスト教の熱心な信者である菅先生との間に如何なる友情があるのか」

氷炭相容れない両宗教の信者同士が二人きりで向い合ってどんなことを話し合われるか、狭量な子供心には池山先生は仏教の信仰以外のことは何も話されることのないと思っていたのである。

今一つは「君もまだ迷ってキリスト教の門まで叩きまわっているのか」と叱られた様な気がした。実際私共は先生の公私の生活が、仏道修業のそれであると考えていたのである。

その後京都大学の医学部に学ぶことになってからは、私共の興味が自然科学の方面に引き寄せられて、精神的な宗教的な方面への興味が薄らぎ勝ちになり、先生とも疎遠になり申訳けのない懈怠の歳月をすごすことになった。ところが、先年、私の母が胃癌で恢復の見込みがなくなった時私は母の最後に念仏の功徳を知らせて頂きたいと思って、先生に法悦のお手引きを願うべく、大谷大学におたずねしたのは、岡山時代から二十余年後のことであった。

御年は召して居られても鋭い気魄が、立ち向う者を圧する、気軽なようで壮重な言葉つかいが、思索の深さを思わしめ、鄭重の中に包まれる威厳が信仰の力であり、落着きのうちに急がれる気持は無限の慈悲であった。

「君、それは急がねばならない」

と早速遠いところをいらしって下さって、病床の母のために『歎異抄』の文言を三回にわたって説明して下さった。私は先生の鴻恩を忘るることが出来ない。

なくなられてから先生を思うと、すぐれた人格が仰がれ同時に偉大なる感化力を思い出される。秋の半も過ぎ虫の音も細り行くこの頃、法縁の恩人、池山先生の面影が今更のように思い起こされる。

（京大医学部名誉教授）

父のことども（二）

池山寿夫

今から思うことですが、父は何時も二人で居たのでした「一人居てよろこばば二人と思うべし」という聖人のお言葉がありますが、そのお言葉が本当に身についていた父、それが一貫して、人間としての本当の実感として持っていた人は父だと思う。

たとえば一人でじっと座っていられる、私からそれを見れば、何を思うていられるのか、なにか歯が抜けて座がしらける思いがして心苦しくなるものですが、父は平気であったのでしょうね。何時間でも黙って座っていて平気なんです。相手の人が居なくてもお茶を飲んでお念仏していた「一人居てよろこばば二人と思うべし」ただそれだけのことなのです。

ある日、父をたずねて来られた青年に対して、すこしも干渉がましいことを云わず、

「自分と君だけでない、そこに今一人のお方がいらっしゃるのでないか。そのお方に君のなやみを聞いておもらいなさい、形なく静かにましますお一人がそこにいらっしゃる、そのお方にね」と申しておりました。我々の家庭生活でも時たまそういう感じをあたえます、どうも家内との間がいたって険悪の状態になることがあります。その時に二人だけだと思うと衝突するよりほかにしようがなくなるのですが、その時そこに父が居ると思う、或はこの姿を見ていて下さるみ親がまします。また、私もその通りだと仰って下さる親鸞聖人がまします、その一人は親鸞なりと仰言って下さる。今私はそのお方と一緒して居るんだと思うと、しようと思わなくとも自然に方向転換が行われることもあるのですなあ。

人様からよく、お父さんは静かな、あかるい方で腹を立てたりなどせられることのないお方であったでしょうね、と聞かれたものですが、事実父はそのような人でした。父から怒鳴られたこともありませんでした。それを今から考えますと、怒らない父だったなあと私は思います。

一体父はどうして怒らなかったのか、父は生まれながらにしてそういう性質のためであったのか、人間であったであろうか、決してそうではないと思います。随分父ははげしい性質の父であったと思います。何時かお話したこともありますが、私が一番びっくりしたのは母の死んだ時でした。私の十九の時でした。お葬式の時、沢山の方々がお悔みに来て下さる、お焼香をして下さる。私はそこに座ってご挨拶をする、しかし其処に父の姿が見えない。私はお父さんは一体なにしてるのであろう、お父さんもご挨拶に出て来てくれればよいにと思うておりました。

父はそのすこし前に、俺は此処におるからお前たのむよと私に云って、隣りの部屋に二枚折の屏風を立てゝ、その中に座って出て来ない。私は父も御挨拶に出てくれてた方がよいのではないかと思いまして、そっとその中をのぞいて見ますと、そこに思いもよらぬ父の姿を見たのでした。父は絞れば落ちる程に濡れたモミクチャにしたハンケチで眼を押さえ、顔もようあげ得ないで悲しんでいる父の姿を見たのでした。その姿を見た時、ハッと思い、とっさに、父に気づかれぬようにして、元の座にもどりご挨拶を続けました。そのようにして母をおくりました。父は野辺の送りには行きませんでしたが、私は母を送りつゝ、送って行く母はなきがらだ、母はあの屏風の蔭に父と居られることだと思うたことでありました。

父は母を非常に愛して居りましてよく一緒に散歩をしました。母が胃ガンで長くて半年の寿命と宣告を受けまして丁度文字通り半年後の六月に亡くなってゆきました。その間に私は父がメソメソした姿を見たことは一度もありませんでした。しかしあの屏風の陰の父を見た時に父の気持がわかったのでした。子供達が寝たのち、二人で手をすり合わせて泣いたのであったな、ということもはじめてわかって来たのでした。そして父も矢張り当時の若い者と同じ人間であったのだとわかり、何とも云えない気持になったものでした。

そのような父でしたが、併し外面的に一応みれば、もの静かな怒ったこともないだろうと人に思われるような父でした。然し実際は人が沢山来て下さるのに、その挨拶もなし得ないまでに泣き崩れるような心の持主でした。それとこれとが何処でどう変化がおこなわれるか。自分が修養の結果、悲しくて一時は悲しむけれども、それを自分の信念の結果、自分の力で立ちおなった姿、腹が立ってムカムカして居るのだけれども、ここで怒ってはならないとした父でした。そのようにして愚痴をこぼしている父を見た人は無いと思いますが、愚痴をこぼしかけたらきりがない程に愚痴の材料にはことかかさなかった筈の人です。

母が亡くなってからの父の生活は、長男の私は遠く外国に出て居る、次男は思想上の問題で高校を退学させられて

私学に通い、その後は刑務所に入る、三男は急病で死ぬ、そのようにして三人の男の子はみな手許には居らない。誰一人側に居らない。その父は唯の一度も子供運が悪くてねと云うたことはなかった。子供に関する愚痴をお聞き下さったお方もないでありましょう、愚痴の愚の字も云わなかった父です。

そのように、どこでどうひっくりかえったのか、父は一人でなかったのでした。私は思う、父は思う存分愚痴をこぼしたのであろう、思う存分悲しみ、思う存分悩んだであろうと思います、その今一人のお方の膝に、そのお方の前に、そのお方に抱かれて……。そうして、そこに完全燃焼が行われたのでありましょう。

我々の家庭生活には不完全燃焼の現象がよくありますね、夫婦のあいだにも、親子の間にも、何か問題が起る、それを燃焼させないまま、いい加減のところで反古にしてそこに置いておく、次から次へと。そしてその生活の中には眼には見えないその反古が山のように積まれているのが我々の生活で、不完全燃焼の中に暮しているのが我々の生活ではありますまいか。

歎異抄に「すべてよろずのことにつけて、往生にはかしこきおもいを具せずして、ただほれぼれと、弥陀の御恩の深重なること、つねにおもいいだしまいらすべし、しかれば念仏ももうされそうろう、これ自然（じねん）なり」とあり、その前に「わろからんにつけても、いよいよ願力を仰ぎまいらせば、自然のことわりにて、柔和忍辱（にゅうわにんにく）のこころもいでくべし」とあるとおりです。はからわざれども自然に、ここに完全燃焼が行われて、反古の山の中の生活でなくして、それらの問題が完全燃焼されたのが父の姿であったのでありましょう。

父は、何も云わない、云ってはいけない、言えば格構が悪いと思うて愚痴を言わないのでなく、もう愚痴を云う、そう云う必要がなくなっていたのです。父の姿はそうであったと私は思うのであります。

それは母との別れは苦しかったであろうと思います。母は満で三十七歳でした。かぞえの三十九歳でした。それにしても五人の子供が枕を並べて寝ている、枕もとで父はどのように悲しみ苦しんだことでありましょう。父はよくも愚痴もこぼさず、狂い乱れた姿も見せず、やすらかさを失わなかったものだと思うのであります。それが、やっぱりあからさまに「柔和忍辱の心もいでくべし」で、亡くなった母に対する愛情がそうさせたのでありましょう。

母は長くて半年のいのちと宣告を受けた、その晩から、一番末の子の添い寝をやめました。小学校へも行ってない弟は、何時ものように甘えて、母の床にもぐり込もうとす

ると、母はキッパリと、姉さんのところへお行きと、頑として添寝はしませんでした。このように表面は至って冷たい母でした。もうわたしの寿命もすこしだから、出来るだけ可愛がってやりましょうという母になり易いのが人情だと私は思います。それに反して私はもうじきに死なねばならぬ身だからもうわたしをたよりにしない子にしようという努力は、余程子供に対する愛情がなくては出来ないことだと思います。それをそばでじっと見ていた父は、どれ程悲しかったことでありましょうか、可哀想になあ！と。

父は、可哀想と思う気持が山となすその苦しみを飛び抜けてしもうて、ナンマンダブ、ナンマンダブ、ナンマンダブ、と父の口からお念仏がほとばしって出ていたことでありましょう。

母は家庭のことは一切何から何まで面倒を見てくれておりました。母の亡くなって後、或日、父は学校で皆さんと記念撮影をしました。その写真が出来あがってきたので、見ますと、父はネクタイをつけてないのですね。ネクタイを忘れて行って、そのままでスマシタ父の姿が写っておるのですね、父さんスマシてるねと笑ったこともありました。まわりの人々も気の毒にと父を見られたことでありましょう。奥さんを亡くして親身に世話してくれる人がないのですなあ！と。それはその筈です、子供達は皆早く家を出ます。家の中を始末するのは女学生の女の子だけです、その子も早く家を出てしまうのですから。

桃の花の咲く二月頃でしたか、旭川の上流の吉備津神社の近くの桃畑の桃の花が綺麗に咲いていた時でした。そこえ、もう歩けない母を背負うようにして行く父と子供達そろって河原まで見物に出かけました。私は弟妹達と河辺の方に行きました。もう動けない母は、父とあの時どのような話をして居りましたことか。どうも子供達の前ではもう直ぐ別れねばならぬ二人であるが、その二人の悲しみを見せまいとした父母でしたが、子供が傍に居ない時、子供の寝たのち、二人はどのように泣き悲しんだことかと思われます。

父はどんなことに出遭っても悲しまない、出来あがった人ではなかった、だからお慈悲が無上にありがたかった。これがつまり「自然のことわりにて柔和忍辱のこころもいでくべし」。つまりお慈悲、云いかえれば歎異抄にある今一人のお方に裏うちされた死生観、人生、信仰で裏うちされた人生、これが池山栄吉の人生であったと思うのです。信仰というものは何を裏うちするか、人間の苦しみの裏うちする、人間の悩みを裏うちする、どうしても悟りきれない、立派なことの出来ない人間そのものの私生活を裏うち

する。これが歎異抄です。その裏うちの時に、一番力強いものは〃俺が居るんだよ、私と一緒に行こうね〃と云って下さるお慈悲、これを聞くか聞かないかが問題だと思うのです。

最近、愛という言葉がいたるところに氾濫してやみません。愛ということを言わなければ歌にも詩にもならない、物語りでも何でも彼でも、世の中は愛、愛、愛と、これ程愛の欠けた世の中は私はないのでないかと思われます。欠けておるから、愛々というのであるかも知れませんがね。

今から三十年程前のことですが、外国人で日本を訪問したある人が、私に、

「日本に行ってスッカリ感心したことの一つに、日本は文化が栄え、電車に乗って釣革にとまっている人が、皆時計を持っている。あのように文化の進んだ国は少ないものですね。それにつけても不思議なことには、その日本人がどうして時間を守らないであろう」

と云いました。これには私、ビックリしたのでした。時計を持って暮らすということも文化です。同時に時間を守るということも文化です。時間を守るために時計があるのです、時間を守らない人には時計は不用品なんです。

しかし、今の我々の生活はこれに類する文化が多いではなかろうか。結局、今の我々は、今の我々というと他人を批判してるようですが、実はそうでない、私自身そうだと思う。裏うちがないのですな！ 人生に裏うちがない、貨幣生活に裏うちがない、共にあい仰ぐものがない。他の一人がない、かたちなくおわします他のお一人がない。これが個人にも、集団にも、家庭にもない。

「世界は二人のもの」という歌がありますが、二人を意識しておろうが、二人を意識しただけではまだあぶないものと思います。人間どうしの中、その二人を結ばしめた他の一人、縁というものをしっかり把握しなくてはあぶないつながりにすぎないと思います。その縁というものをどうして認識するか、そこにやっぱり仰ぐ心がなければ、なにかと仰いでくらす、仰いでくらす尊さが思わされるものであります。

縁あって夫婦となり、兄弟となり、縁あって親子となる、縁というものは偉大なものである、尊いものである。そういう心を感知する心は、何と云いますか、粘着力といいますか、張りと云いますか、ねばりと云いますか、心のそれは、つまり人間は仰ぎ見る、仰ぐ他のものを持った生活にはじめて出来るのでありますまいか。

いやにお説教めいたことを申しあげましたが、父があれ程不幸の苦しみの中にかこまれながら、しかもそれを一度も愚痴いうでもなく、もらすでもなくくらした。その偉大

さ、それは父の偉大さでなくて、父をしてそうあらしめたお慈悲のはたらきで、お慈悲の偉大さをしみじみと思う次第であります。

父は母を亡くして十年後に再婚しました。その時私は外国に居りましたが、父から一通の手紙がとどきました。大変よろこんだ手紙でした。その手紙に、

来し方の十年（ととせ）の冬をしのぶかな
また人生の春をむかえて

このような歌でした。一寸ちがうところがありますか、たしかにそのような歌でした。

この手紙を見た時私は、ナンダ、父さんノロケテルぞ、と思いました。ところが最近気がついてみますと、この歌は、父が亡くなった母に対して送った歌でないかと思われます。清子よろこんでおくれよ、お前の居ないながい十年間でつらかったよ。だけれどまたお前に代る人が来てくれたんだよ、どうぞよろこんでおくれ、と。この歌は死んだ母を忘れて作った歌でない、死んだ母に捧げる歌であろうと私はこのように思うのであります。

父は学者的のこともなく、能のない父でございます。けれどもひたすらに、お慈悲に気づいておくれよと私達子供に願い続けた父でした。このようにひたすら弥陀のお慈悲をしみじみと仰ぎ〳〵この世を去った父でありました。

今日のお話、まことにとりとめのないもので終らせていただきました、どうも長時間、まことにありがとうございました。

（昭和四十七年七月十六日、於一道会館）

御紹介

意訳歎異鈔　池山栄吉著

定価　三五〇円　送料　一一〇円

発行所　京都市下京区堀川通花屋町　百華苑

振替　京都二五七八八番

（自序）去年は亡き妻の記念として独訳歎異鈔を公にしたが、今年はまた亡き母の記念として意訳を出すことになった。……之を縁として本文を読む人が一人でも増えれば、それで私の希望は足りるのである。

大正九年一月十一日、岡山にて

池山先生のプロフィル

北岡行男

池山先生のお育てを受けた一人として憶い出を語ります小生はすでに古稀近く、先生の御逝去なされた齢を超えたかと思えば勿体なくもお恥しくも感じます。

お在世中、御温容を拝し、ご声咳に接し、ご信心に触れ得たしあわせを悦んでおります。半世紀近く経ちました古い記憶でありますが、今も鮮かに眼底に映り耳の底に残っております。けれども多分に思い違いや独り合点もあり、且つ舌足らず筆拙くてご尊意を汚すおそれなきやと汗顔いたします、哀れ、象を評す群盲の一人をお思い下さい。

一、先生の風貌

先生のお自宅を未だ訪れず、六高で教壇上の先生からドイツ語を教えていただいていた頃、先生が絶対他力の信仰の体得者であらせられることは校内に響いておりました。

思索型青年であった私には相対を超えた絶対の境地は大いなるあこがれであり、先生はその具現者としてゆるぎなき大盤石、底しれぬ深渕のような人格者に見えました。先生は人並より丈低く痩型でやや猫背でありましたが、尊敬のレンズを通して見たお姿は大きくクローズアップされました。教壇上の先生の御顔ばせ、長く濃い眉毛と口ひげ顎ひげを貯えられた荘厳なお顔、お咳き。一語一句、廊下を歩かれるお足どり、すべてが、軽やかさの中に荘重さ、奥ゆかしさ、がうかがわれ、時には冷厳にさえ見えました、近づき難い畏敬の対象でした。

その冷徹、尊厳のご風格の中に、温顔、慈語を感じだしたのは、後年先生の門を敲いた後のことでした。

二、到り届いた御親切

校内で催されたドイツ語の演説会に参加すべく、私は柄にもなくドイツ文の原稿を携えて先生の査閲をお願いしました。その原稿は熟語も文章の構成も全く間違いだらけの支離滅裂で、おまけにドイツ文字がすこぶる悪筆の金釘流で、実にわれながら冷汗ものでしたが、先生は御多忙中にもかかわらず刻明詳細に添削（てんさく）の労をおとり下

され、原稿紙はほとんど朱筆で埋まりました。お蔭で私はそれを暗誦して演壇に立てたのですが、その節の先生のご親切は身に泌みました。担任教授として生徒への通常の関心を超えた到り届いたご親切に私は頭を垂れて感動し、仏の慈悲もかくやと覚えました。

三、宗教は無理数

岡山の高校時代、花田、玉尾、山本君らの後について先生の門を敲いた私は、煩悶、悲観等の具体的問題を持たず抽象的求道者だった、嘴の黄色い青書生だった。自我、他者、意志の自由、生死、神仏の存在等に関して、体験のともなわぬ抽象論をもって先生に挑んだ。それは横綱の胸を借る幕下に似ていた。

先生は始終うなづかれながら耳をかたむけ給い、急所、急所をねんごろに説いて下されたが、私には猫に小判、豚に真珠で残念ながら納得いかぬ、私の固い胸、寒い風の吹き抜ける空洞のような胸は依然として元のままである。

私の浮かぬ顔をご覧になって先生は「儂も哲学を勉強しておくのじゃったかな」と仰言った。これは揶揄（やゆ）でも皮肉のお言葉でもなかった。先生はゲェテのファウストも、ニイチェのツァラトストラも原著で味読せられた、その哲学はご存じである。けれど、も少し系統立って研究しておれば、この青書生に納得いくように哲理と宗教との相違を説明出来るものをとお考えになられたかもしれぬ。いや、そうでなくて「若い者は思索の森に迷うこともあるが、それでもよいんだよ、いずれは迷いの森から抜け出して宗教の世界に落ちつけるさ」というお心持だったろうかそして、こうも仰言った。

「宗教は科学や哲学では割り切れぬ無理数のようなものなんだ。割り切れぬところに無限の深さがあり、独特の味いがある」

と。そして理屈を云いたい時は云うさ。反発したいときは反発するがよいよ。そのうちに世の体験を重ねて、力なくして立ちすくんだ時、大いなる力があらわれて救って下さる。時節の到来があるんだよ、とのお気持もあったのだろうと、後日になって思い合わされたことである。

四、女房の方が入信が早かろう

私は女房持ちの大学生だった。洛北蓮華谷のお宅を女房同伴でお訪ねした。ある時、先生は

「北岡君よりも妻君の方が入信は早いと思うよ、後の雁が先きになるじゃろう」

と仰言った。烱眼なる先生は私どもをよくお見透しであった。女房は素直で敬虔的である、しかもその表情の奥に

家庭苦が潜んでおるのを透見されたのであろう。それに反して私は頗る頑固で高慢で封建的である。呑気な反面、神経質で穿索癖がある、それもお見透しであった。

先生がよく引合に出された、ゲエテの美しい魂の告白の主人公、マルテの手記にある如く、入信にはそうあるべき態度、恰好の受入態度が必要である点から見れば、女房の方が入信が早かろうことは当然でありますと私は心に諾い先生の裁断に頭が下った。

五、先生に碁を学ぶ

先生の碁は専門家の域に達しておられた、当時、野沢竹朝七段に三子の手合だった先生に、井目（せいもく）を置いて打って頂いたことがあった、そして散々に負かされた。先生からご覧になれば赤ん坊の手を捻るようなものだったろう「すこし碁が分っているが力が弱いね」と仰言った。

この時の先生は如来さまに見えた。自分は非力である、葦の葉のように弱い人間であるという自覚が潮のように押し寄せた。そして「信仰は力なき者への力からの呼びかけである」との常の仰せが身にしんだ。

六、信仰は力瘤の解けぬ間は駄目

「力んでいる間は駄目だよ、握りこぶしがゆるんだときはじめて信仰は本物になる」

と仰言った。力瘤は自力精進である。身の程知らぬ高慢である、痩せ我慢である、自力のたたかいである、私は聖道型であった。一徹であった、身の程知らぬ力み屋であった。それをもどかしく思われてのお言葉であった。握りこぶしのゆるんだ時とは、十八願転入の光景であろう。

「仰向けに仔犬ねころぶ日南かな」は先生の名句である

この境地は骨の髄まであたたかくほぐれている、力みがない、固さがない、ぎこちなさが見られぬ、軽やかに罪業も生死も超えている、一切放下である、否、照らされて暖かに自然にほぐれている、ああ力瘤の解消こそ大いなる受入れである。

以上、先生のお言葉を憶い出して自見を綴りましたが、甚だ粗雑、逸脱の段、みなさまのご容赦、ご叱声をお願いいたします。

昭和四十七年八月二十二日夜

紀伊田辺にて稿了

あまねく

信国　淳

学院（大谷専修学院）では今、歎異抄第九章の講読が続けられている。第九章というと私には、それと切り離せぬ或る一つの思い出がある。それは私がたまたま人の世に生まれ、心から傾倒する幸わせをもつことのできた唯ひとりの師、故池山栄吉先生につながる思い出である。

私が先生の門をたたき、親しくお話を聞かせてもらうようになったのは、先生からすればもう晩年に属する時期のことである。そのために私は、すでに老齢に達せられ、頓に健康を損われたかと見られる頃の先生のお姿に接することの方が多かった。洛西は蓮華谷の、京の町への展望の美しく開けたお住居に伺っても、先生は私をベットの上に座ったままで迎えられ、それからその日のご気分次第でおもむろに話を始められるといった具合であったのである。

そんな時私は、先生の後ろ近くに座を占めて、先生のお身体のあちこちにそっと手を当てながら、お話を聴聞したものである。というのが、恰もその頃私が、手のひら療治と称する一種の民間療法に興味をもち、臆面もなくそれを先生に試みてみようとしたからであって、それにまた先生も先生で、そんな私の怪しばな療法を、もの好きにも、ここころよく受け容れて下さっていたのである。思い出してみると、まことに可笑しなこともあったようで、或る時など、先生の心臓の在り場所をすっかりとり違えたまま手を当てていた。そのうちそのことに気がついて、思わず赤面し、狼狽せざるをえなかったが、しかしそんな時にも先生は、いつに変らぬ涼しいお顔で、ああ、いい気持だった、とおっしゃられ、私の労をねぎらって下さるのであった。「無事これ貴人」ということばがあるが、先生こそその貴人だと、私はそんな先生を見るにつけ思うのだった。

そうした或る日のこと、先生は、その時たまたま手にしていられた書物の中から、「独文洽読」とある文字を指差されて、これ、何と読むんでしょうか？と私にきかれた。私が何気なく「コウドク」と読むんでないですか、と答えると、「洽」って、どういうことなんかなあ！と重ねて問いをかけてこられる。私はいささかあわてながら「アマネシ」と読むんと違いますか、この字は？と、やっとの思い

で返答する。そしてそれに先生が何と云われることかと待っていると、やがて先生は、なるほど、アマネシでしたね本当に、と、口のなかでつぶやくようにおっしやられ、それから何か感に堪えぬような面持で、じっと虚空を見つめられるような風なのである……。そしてその時ふと私の気づいたことは、先生のその居間の壁面に色紙掛が一つあって、その日はそれに、先生ご自身のあの美事な筆跡で、「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」と認められた真赤な色紙一枚がかかっていたということである。

事柄はそれだけである。それだけで私に、もう全く忘れられぬ思い出になっているというのは、いまのその、ささやかな問いかけを通して先生が、どんなに温かい教化の手を私に差しのべて下さっていたかということが、その後どうやら私にも判りかけてきたからである。

私はその頃先生の導きにより、親鸞聖人のみ教えに近づく機会を与えられ、聖人の云われるような信心の歓びに、自分では少し触れえたように思っていた。そんなことで私は、当時心がよほど高ぶっていたのに相違なく、はたからの見る眼にも、変に気負った、高慢ちきな、念仏者ぶった人間として映っていたであろうと思うのである。だから又そんな私に、聖人のいわれる信心の道が、単なる個人の往く道でなく、却って、「あまねくもろもろの衆生と共に」往かなければならぬ道だというようなことは、もとより判りようもないことなのであった。先生がいまいうような問いの形で私に与えて下さったご教化は、まさにそうした私への頂門の一針だったのに違いないと、今にして私にも思い知らされることである。

「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」とは、云うまでもなく「かくのごときのわれら」というものになり「かくのごときのわれらがため」として他力の悲願を受けとる者ではじめて、心から叫び出すことのできる言葉である。そしてそのことは逆にいうと「かくのごときのわれらがため」と云うことの出来る人間、――すなわち「普く諸々の衆生と共に」ということができ、事実もろもろの衆生と共に他力の悲願を受けとることのできる人間、――そんな人間を私どもの内に、私どもの信心によって生み出し、創り出そうとするものこそ、実に他力の悲願にほかならぬということなのでなければならぬであろう。当時私はただいい気になり、わけもなく先生のお身体に手を当てていただけのことであったのだが、そうして当てた私の掌を通し、先生から私にまで返され、伝えられてきたものは、尊くも温かい導きのお言葉であったのであり、そしてそのようにして私に導きのことばを与えて下さった先生はすでにして「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」と深くも信知し、深くも叫び出される先生であったのであり、そんな先生が私の側に、私と同じ衆生として同座され、私と共にその悲願を、「いよいよたのもしくおぼゆる」ものとして、いよいよ深くたのもうとされていたのであった。

（我、我が名、我が国）より

池山先生の追憶

榊原徳草

池山先生御往生になって既に三十余年になり、まことに烏兎（うと）忽々の感が深い。

○「先生」と「よき人」とは私にとっては同義語であります。この世に生をうけてから数々の人格者、宗教的体得者には会うことができた私であり、それらの師と呼ぶべき人々の恩徳は感謝せずにはおられない。併し「好き人」となって私に無くてならない人、唯一の人は池山先生である。

先生の「池山におきては、唯念仏して」の一語が、いつの間にか私の心の座となり、生きることの座りがついたのであった。この一語は歎異抄の「親鸞におきては、唯念仏して……」からくるので、それは先生が四十二歳の時に体験せられた光りの滝の言葉である。先生のその後の生涯のすべての源泉はこの一句にあって、ここから先生のあらゆる対話、講話、動静が自然に涌き出ておられた。「池山におきては唯念仏して……よき人親鸞聖人の仰せを蒙りて」が先生のすべてであり、おいのちであった。

私にとって、歎異抄が生命を吹き込まれて、立体的に働き出す生命の書となったのも先生によってであった。吾々は当時よく言ったものである。学者は本抄の著者は唯円房だとか如信上人だとか言っているが「イヤ歎異抄の著者は池山先生だ」と。こんなに放言して、先生あってこそ本抄に遭い得てその光りの座、阿弥陀湯にひたることができたことを喜び合ったのであった。

鹿を追う者は山を見ずとか、最初に花田先生に勧められて、京洛の下総会館で「継母（ままはは）」の題で、へだてとまことについてのお話を聞いた時は、何の感興も無く、

これが有名な池山先生なのか、と期待はずれの空しい気持で、自動車で帰られる先生をぼんやりと見送りました。

「皆さん、無くっちゃならないものは何ですか、それはお念仏です」と先生はよく仰言った。その「なくっちゃならない人」に「なくっちゃならないお念仏」、つまり「好き人の仰せ」、「好き人」に何時の間にか池山先生がなってしまわれたのか、具体的な経過は解らない、何時の間にか私にそうなったのである。

念仏と言えば先生であり、先生と言えば念仏で、全く人法一如が私にとっての先生である。三千年前に釈尊の会座に座る御弟子達、七百年前に聖人の仰せに聞き入る人々、唯円房、それがそのまま池山先生の前に座る者の身に感ずる心境から想像され、追体験されるものであったと思う。

○先生の思い出の幾つかの心に刻まれたものを述べよう。

いつだったか、先生のお宅で皆で色紙に寄せ書きをしたその時私は「不捨」と書いた。それを「これは？」と先生に問われた。私はその時、腹の中は動揺しながらも、「摂取」して下さっていても、疑うたり、逃げたりする奴であるから、如来は重ねて「不捨」と呼びかけて下さる、その不捨がありがたいという意味を申上げたが、そうですかとも何とも仰言らず黙って、それきりであった。この後口（あとくち）の厳しく私に響いたこと。〃君はそんなのかね〃と厳として私に一棒を与えられた感がしたことであった。先生は慕わしい温情の人であると同時に、峻厳な怖い人、私を底の底まで見透している人でもあった。先生の前に行けば浄玻璃（じょうはり）の鏡の前に立たされたも同然の感がするのである。先生は念仏に生きられなくても偉大な人であったと思われる、世間並の人格でなかったと思う。そんな先生が社会事業を志し、明治三十年頃に労働福祉を提唱され、種々苦労された挙句、自分自身の中に名利追求の念のはげしさに気付かれ、歎異抄に開眼せられて念仏者となられたのであるから、鬼に鉄棒といった光彩を放つ徳風を持たれたのだと思う。

私は洛北、蓮華谷のお宅へよく通った。何か胸に雲がかかると行き、困ったことができると行った。そしてお宅の下の坂路で一服する、煙草を吸って心を調える、高い崖でも登る気持でお伺いする。やがて先生の前に座る、先生のお口からお念仏がもれる、私も唱和する。そしているうちにいつの間にか胸中の暗雲はさらりと晴れてしまって何もお尋ねすることがなくなってしまうのであった。

〃夕涼み、よくぞ男に生れけり〃これは先生がよく引用された句である。凪の暑い仕事もすみ、床机に裸一貫で夕涼みの爽風颯々（そうふうさっさっ）たる風景はそのまま先生の前に座る人々の念仏の涼味であったに違いない。一

切の繋縛から解き放たれて「よろずのこと皆もてそらごとたわごとまことあることなきに、ただ念仏のみぞまこと」が実証実感される風景である。

○昭和十二年九月、日支事変の第二回大動員で召集令状が来た時、私は一番先きに先生に報告した。京都駅を出発する時に駈けつけて下さった友子奥様と待合所の柱の所でお会いしたが、そのとき「主人は昨夜、近角常観先生の御長男と、あなたとの出征を知って、転々反側して一睡もしませんでした」と奥様から聞き、私は胸が塞って涙がとまらずお念仏してうなだれ、そして思った、よし、御国のために死んで悔いないと。又、戦地での上海戦の四十五日間の悪戦苦闘の最中に、慰問袋が到着したが、その中に一枚の色紙があった。それは同信の法友達の寄せ書きであったが、その中央に先生の字で「我能護汝」とあった。私には先生のこの書がそのまま如来の声と聞えた、先生と如来様とは不一不二であった。弾丸を鉄兜で防いで、棉畑の戦場で匍匐している私は、「先生がここまで来ている、よし！」と決意に燃え感激にしたったことであった。

○先生が大病せられた時、お見舞に伺った。玄関に立つと女中さんに「面会謝絶ですから、お姿を拝するだけです」と注意されて、私はそっと恐る〳〵お病床のお姿を拝して黙って点頭して引き下った。その時の先生のお顔はいつもの温顔ではなく、非常な苦痛に堪えていられる苦悶のお姿であった。帰途私にしらされたのは、先生でも病苦の時はああなるんだな、ああ私にどんなことが起きても先生と同じで居られるんだと。

○戦地から無事に帰って、先生に御礼と報告に参った時、わが子が帰ったように喜んで下さって立派なお膳でご馳走して祝って下さった。先生はその時「私は身体の調子が良くないので一緒に頂けないが……」と仰言って居間に下られた後姿は、いつものように帯の結び目を右前に垂らしたあの姿だった。（私は今でも帯を時折り真似て結ぶことがある）

吾々は先生をお迎えしては、あちこちで講演会を催した。京都学生親鸞会、大阪女子親鸞会、岡崎親鸞会、等々の主催で、京都、大阪、三河などである。京都の下鴨に「聖鸞寮」があり、先生に月々法話会をお依頼し、又「聖鸞寮誌」を発行した。私は又、大阪の梶井様の出資で「聖鸞」という月刊誌を発行し、先生の玉稿を頂いた。その原稿の一つが今でも宝物のように大事に保存している。

○私は先生のご講話の時は、開閉会の辞をのべる役を受持った。開会の時は、私のその時の味いをも話したものである。先生の前講をするのは楽だった。後に先生が控えていられるのだから張り切って若さを爆発させて、大船に乗っ

た気持で情熱を傾けて絶叫したものである。

○　大阪の綿業会館での会だったか、私はその頃、教行信証の聖人の三心釈が有難くて仕方がなかった「如来、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋（ぎがい）雑わること無きに由りてなり。斯の心は即ち如来の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因と成る。如来、苦悩の群生海を悲憐して、無礙広大の浄心をもって諸有海に廻施したまえり。これを利他真実の信心と名く」。法蔵菩薩の願行が至心、信楽、欲生の三心の一々に、一念一刹那も疑蓋（ぎがい）まじわることなきご苦労が重ねられて成就され一に如来の私を憐れんで下さる大悲心である。「三心即ちこれ大悲の一心」と聖人は頂かれる。その聖人の生命の躍動している御文を拝読するとき、感激は高調して「この大悲の念仏を聞かん者は、それは人間ではない？」などと感激極まった前講をしたことだった。先生は私の話を演壇の前で聞いて下さった。私と保木さんとは満堂の聴衆の一番前に座って、先生のこれからのお話を待っていた。

先生は演壇に上られて、「只今、榊原君のお話を聴いておりましたが、フトこんなことを……」と云って、くるりとうしろの黒板に、

寒むけりゃ寒いでえじゃないか

偉らそな顔をせぬがよい

と書かれた。私は冷水三斗の思いで、穴でもあればはいりたかった。一番前に座っているのだし、進退きわまる思いだった。この場の光景を今でも忘れられない。四十余年前の懐しい思い出である。

その時の先生の御講題は「桧舞台に呼び上げられて」で歎異抄第九章の

「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじ心にてありけり、よくよく案じみれば天に踊り地に躍るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思いたまうべきなり。喜ぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩悩の所為なりしかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりと知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり、云々」

まで読まれて、ここで先生は

「皆さんはどうか知らないが、私はここでハッと気をつけるのです。途端に自分の居場所がガラリと一変するのを覚えます。それはほかでもない、聖人の〃かくの如きのわれらがためなりけり〃とあるお言葉に釣りあげられるのです。何のことはない、針の餌をなめている鮒のうしろでうろうろしていたぼはぜが、鮒のつり上げられる拍子に横

腹に針をひっかけられたようなもの。今までとても他の場所とは違って、影には隠れていながらも、ただ他人事とは思わないで、自分も一緒に渦の中を泳いでいる気持だったが、とにかく影にひそんでいるだけ、半分は見物気分でいた私が、今はどうでも前に出て、正体をあらわさずにはいられなくなったのでず。

〃あ、これこれ、その唯円房のうしろに控えていられる方々、まあまあここへ出ていらっしゃい。我等がためなんですよ、榊原さん、保木さん、あなた方一人一人のためなんですよ〃と聖人に呼びかけられ、話しかけられるのである。観覧席から桧舞台に呼びあげられるのである。

何たる驚くべき転化であろう！自分は今、唯円房と並んで、聖人の眼の前に座っているのである。直々聖人の謦咳（けいがい）に接するのである。面授口訣をうけるのである。自分は今、聖人の相手役を仰せ付けられるのである。そして本願招喚の勅命を聞きつつあるのである」

以上の文章は、先生の『仏と人』の中から引文したのであるが、私等が大阪の会で聴いたのもこの通りであった。

「何某さん、何某さん」のところへ、私と保木さんの名を入れて、そっくりそのまま著書の文を拝借したのである。

○先生の御居間の壁に、

よろこばぬにて　　一道

と色紙に書いてあったので、先生私に下さい、と言ったら、また書いてあげよう、と云われたきり、とうとう頂けなかった。その書体を覚えている。よろこばぬのぬの字が実に太く悪筆に、それこそ毒蛇悪竜というか。煩悩の燃え立っている様子というか、一見異様な感を起こさせ、煩悩具足の身を写し出されているとまざ〳〵と感じさせられる字体で、今も忘れられない。先生が桧舞台によびあげられる姿そのものと思われてならぬ、眼底に深くやきついた色紙である。

先生の御講話の時には、最初は黒板にチョークで書かれたが、其後模造紙と筆と墨汁を用意し、紙は何枚も黒板にピンでとめておくようになった。先生か何かサラサラと書かれてその話が終ると控えている法友の誰かが、めぐって行く。次々にこうして先生の筆跡が沢山出来ると、法友達が頒ち合った。私は仲々それが手に入らなかったが、何時のお話だったか、三願転入のお話で、第一、第二、第三の転入を「転化」の言葉で話された。その「転化」の一枚が私の手に入ったので先生のお写真の後に掲げている。

先生の御晩年は大谷大学でドイツ語の教授をせられたが現在の独協大学の前身、ドイツ語協会学校の御出身で後藤新平氏と同期であった。光演法主を中心とした宗教法案問題に、近角師と意気相投合して活動され、やがて成功した

暁に、東本願寺から、近角師と欧州遊学を命ぜられた。近角師は世界の宗教事情、池山先生は社会事業問題を研究されたと聞く。先生が四十二歳で念仏者となられるまでの宿縁は篤信の御母堂の感化と、近角師との欧州遊学の御縁が大いなる力であったと私は常に思うことである。

さて先生はよくゲエテの「ファウスト」を引用されてお念仏の味いを述べられた。何時だったか東本願寺の報恩講の記念講演を高倉会館でせられた。先生はいつも脊広服姿ばかりであったが、この時は立襟の。モーニング姿、そして房の大きな一重珠数を持って居られた、私はこのお姿を拝して胸せまるものがあった。

その時の講題は「百翁ファウストの最高の刹那」であった。森欧外訳のファウスト第二部第五幕「宮城内の大いなる中庭」の中に現われるその場面を写して見よう。

ファウスト、あの山の麓に沼があって、悪い蒸気がこれまで拓いた土地を皆汚している。あのきたない水のはけ口をつけるのが最後の仕事でまた最上の仕事だ（略）

大胆に働いた民等の築いた高い丘を繞って、新開地に面白そうに、すぐ人畜が居つくのだ。（略）凡そ生活でも、自由でも日々これをかち得てはじめてこれを享有する権利を生ずる。だからここでは子供も大人も年寄りもそういう危険に取り巻かれて、まめやかな年を送るのだ

己はそういう群を目の前に見て、自由な民と共に、自由な大地の上に住みたい。己は「刹那」に向って、「止まれ！お前はいかにも美しいから」と叫びたい。己の此世に残す痕は劫を歴ても滅びはすまい。そういう大きい幸福を予想して、今、己は最高の刹那を味うのだ。

（ファウスト倒る。死霊等ささえ持って地上に置く）

百歳になった老翁の死の直前の「最高の刹那」をお念仏に味って、最高の「輝く光り」のお念仏と先生が説かれたあの時の先生のお姿が眼に浮かぶ。

それから、この場の一寸前に、メフィストフエレス、ファウスト、それに、死霊が出ていろいろのせりふをかわされるが、その中で死霊が、死体を葬むる穴を堀る時の詞を先生は次のように訳された。

若く生きてた、恋もした
愉快なもんだと、思ってた
揚気な音色に浮き浮きと
足もおのずと乗り出した
やがてばったり意地悪の
杖もつ老奴（おいめ）とでくわした
墓の戸口で躓いた

南無三、扉（とびら）が開いてた

先生はこんなに流暢に訳しておられる。「墓の戸口で躓

いた、南無三、扉が開いてた」のところは、いつだったか先生のお宅での「一つの会」の集りで、先生の筆でこの節全体を書かれた大紙を掲げてお話し下さった時、「お念仏が無かったらどんなだろう」と、自分が墓穴に滑り落ちる感の中でお念仏したよろこびを思いだす。

先生のこの素晴しい訳と、欧外の訳とを比べて見たい。

己も若くて生きていて、色もした
なんだか随分好かったかと思われる
どこかで好い音がして、面白そうだと
己も出かけて踊ったものだ
そのうち老という横着者が
杖を持ってきてくれた
己は一寸つまづいて、墓の戸口へ転げ込んだ
なぜまたあの戸が折悪しく開いていたやら。

メフィストフエレスはファウストを色々の世界へ連れて引き廻す悪役である。最初にこの悪魔はファウストに近づくために、黒犬になって扉の外から這入ってくるのが始まりで、これはファウストが黒犬が好きだから、その好きなものにメフィストが化けて近づいたのである。私は先生からこの黒犬に化けて悪魔が近づく話を聞いて、私の欲望のすべては悪魔であると深く知らされた。

私は新緑の頃、窓外に眺める柿の木の黒い幹や枝、そして枝の黒い肌から萌え出てくる可愛い若葉が大好きだ、春もすぎ新緑に移ろうとする柿若葉が好きである、それで

メフィストは緑衣に替えて柿若葉

と駄句を吐いたことがある。いいなと思ったら、それはメフィストの化物なんだ、気をつけなさい、とお念仏に照らされるのである。

先生は、このメフィストのことを、日本ものにすれば、あの玄治店（けんじだな）の蝙蝠安（こうもりやす）みたいな奴だと云われた。あのいやらしい、そして欲が深くてずるい、芝居に出てくる蝙蝠安、赤い裏の女物の着物を着て細紐をしめた、厭な奴、これがメフィストである。私は先生の「ファスト」の訳があったらどんなにいいかと、よく思うことがある。

○岡崎親鸞会に先生をお招きして講演会を催した時、岡崎城趾にある巽閣で開会。先生は登壇第一声に

「雨は降る降る岡崎の城に、花を催す雨が降る」

と、その時の感懐を歌われた。丁度春の桜花の開かんとする時の春雨が煙る日であったので、先生は開会前の控え室で浮んだ感想がそのまま即興詩となって、それを早速聴衆に披露されたのであろう。

私はこの歌をその後ずっと心に留めて、否この歌が私の

心に染みついて私に語り続けているものは、この岡崎の地にお念仏の華が開き大悲に浴する人々の多かれかし、という先生の深い思し召しがそこにあったことを思うのである。春雨の如く静かに大地に滲みわたって南無阿弥陀仏の華を催してほしいという、先生の切々とした願いがこの歌にこめられていると感ずる。

先生の御宿は小妻の実家の杉浦家であったが、先生に岡崎親鸞会のために先生の御名号の揮毫をおたのみしようと用意して待っていた。先生が洋服を丹前に着換えてお座りになった。そこえ鬼頭康彦君や小林ひさよさんなど会の面々が画箋紙と筆と墨を用意して、名号をお願いした。

先生は筆をとって「南無阿弥」と一気に書かれる。私は彌の字がかすれてくるので早く墨をと思った途端、先生は前を向いたまま筆を右の硯に無雑作に入れて「陀仏」と墨色鮮やかに書きおえられた。この間、実に早いもので、瞬時に書きおわられたのであった。

周囲に緊張して拝見していたものは余りの早さに茫然として言葉も出なかった。すると先生は「これでもはからいずめですよ」と静かに仰言るのであった。

この御名号は現在も杉浦家の家宝として離さないでいる。これを印刷して一道会に記念としてお頒けした。境内に建立した名号碑はこのお名号を刻んだものである。

この境内の庭の一角は、私達は「名号碑の庭」と呼んでいる。この碑の裏面に矢張り先生筆の

一心正念　オネガヒダカラ

直来　スグキテオクレヨ

が刻まれている。これは花田先生の奥様の見舞に書かれた色紙から写し刻んだものである。そして碑の下には先生はじめ一族の御遺骨、並びに先生と一緒にと願う人々の数人の分骨も納められている。私などもいづれここに納めて貰うつもりである。

（四七、九、八日）

池山先生生誕百年に憶う

花田正夫

先生が岡山に居られた頃、法然上人の誕生寺にお参りされた時の感想を『信を行く旅人』に誌されて、

「汽車は私をのせて走って行く。その間私は何とも言えない霊感にしみじみとひたった。私は思いました。今自分は、空間的には僅か二十里たらずのところを行くだけであるが、時間的には七百余年の昔にさかのぼって、自分の魂の源に近づきつつある。なぜというと、若し法然上人がお生れにならなかったなら、真宗の祖師、親鸞聖人の出現もあり得なかったに違いない。

曠劫多生のあいだにも出離の強縁しらざりき、
本師源空いまさずばこのたびむなしくすぎなまし

七百年の昔、吉水の禅房での両聖人の会見は、親鸞聖人に『よき人のおおせをこうむりて信ずる』機会を得せしめた。もし親鸞聖人にこの機会が見舞わなかったとしたならば、親鸞聖人をよき人と仰ぐ今日の自分も出て来ようはずがない。自分の今日あるは、ひとえに親鸞聖人のおかげであり、聖人の出現は、法然上人の誕生に依属する。

信仰の流れが古今一つである以上、自分のからだの誕生は明治某年であったにせよ、心のそれは遠く七百年の昔にさかのぼる。法然上人の誕生地は、即ち自分の誕生地である。こうして、誕生寺へ行く道すがら、時処を超越した偉大なる信の上の自分を観察することが出来た」

とある。

私共も池山先生から歎異抄を教えられ、本願の念仏をお聞かせいただけなかったならばと想像するさえ慄然とする。してみれば先生の生誕は私共の誕生と云える。そこに時処を超越した信の威大さに触れて驚歎するばかりである。

さて私自身の七十年近い生活を省みる時、ともかくも不完全な人間同志のこととて、親しくしたり、争ったり、喜んだり、悲しんだり、色々なことは起るが、変らず長く続く交誼は、念仏を媒介とした間柄であった。さらにこれは死の彼方にまで倶会一処（ぐえいっしょ）とつながることを信知せしめられ、この念仏の道に導いて下さった先生の御恩がいよいよ身にしみる次第である。

はじめありておわりなきみち
南無阿彌陀仏

聚墨生

あとがき

御案内

時＝十月二十九（日曜）午后一時より
所＝京都市右京区山田開町、浄住寺。
京都駅より苔寺行きバス終点下車。
新京阪、桂乗り換え、上桂下車。
池山先生生誕百年記念一道会。
物みなのうつろう世にあって、万古不易の一道の光の中に、一期一会のめぐみをいただきましょう。

不図気づいて見ますと池山先生は明治六年のお生れで、御生誕百年にあたりますので、先生の一道会を前に特集号をおとどけ申し上げます。

先生御往生の時の近角先生の弔詞も頂きました。又、舟岡先生のお原稿も『呼子鳥』の中から頂きました。

また皆々様の御原稿を頂き、深謝しております。年々釈尊の誕生会と、親鸞聖人の降誕会が催されますが、世間一般の常識から云えば、亡き人の御命日を記念するだけでありますのに、釈尊や聖人の御誕生は、私共の魂の誕生に直結しますもので、こうした方々は今現に私共のいのちの中に生きていられるのであります。そこに、御入滅の涅槃会と御正忌が大切にせられるように、誕生会も私共にとって大切な日であります。

このように池山先生の生誕百年を迎えて、平素忘れていたことどもの中に、深い味いを頂くことであります。又この際に、生涯愛読され、先生が歎異抄か、歎異抄が先生か、一味にとろけられての上にものせられた意訳歎異抄が百華苑から発行せられました。活字も昔のままの大きなものになり、榊原徳草師が懇切に校正して下さったものであります。座右におかれて御味読頂きたいものであります。先生がよく仰言いましたが「歎異抄の言葉はダイヤのようである。ダイヤは見る人の方向によって赤、黄、紫、等々と色々な光を放つように、歎異抄の言葉は、読む人の境遇とか年令によっていつも新らしい味いがある。大切なことはくりかえしくりかえし拝読することである、そこに底のない深さと、ほとりのない広大さが信嘗せられる。又、本抄は全部読まねばわからぬというものではない、どこか一ケ所が身にしみると、そこから全体の味いが流れ出る」と。歎異抄という宝の山で、真実のたからを共々にいただきましょう。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半、日曜例会。
市電　新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル二軒目。
○毎月二十四日、午前、午后。昭和区小桜町、教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。
市バス、北山下車。

慈光第二十四巻　第十号　昭和四十七年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可

定価　半年　四〇〇円（送共）
一年　八〇〇円（送共）
編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎
発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
那便番号四五七